



FDの環境作り

教育人間科学部長 川村 隆明

最近言われているFDは授業改善との関連で議論されているためか、授業の内容ではなく、講義の進め方あるいは方法など技術面に力点がおかれているように思います。大学の授業の基本は、やはり内容が第一であることを、今一度確認しておきたいと思います。

大学生とくに意欲ある学生は、話の内容を中心に聞いていて、授業後の質問も、感心するものが少なくありません。このような学生の質問を受けると、われわれ教員が研究をしていることの大事さを痛感させられます。今、何が問題になっているのか、何が、どこまで分かったのか、などを答える必要が出てきます。私のような自然科学を専門とする分野では、とくに現在の問題点がどこにあるかが、次の世代をになう学生にとって大切であるのが理由かもしれません。

しかし、中には教科書に書いていることを、分かりやすく説明してもらうことに、関心がある学生もいます。これは、本人の理解力の不足を、教師や塾の先生に頼ってきた結果なのかもしれませんが、このような学生も自分の担当する授業の受講生だとすると、無視することもできません。この他力本願学生にも二種類あって、一つは自分で学習することを身につけようと努力している学生、もう一つは、自分が理解できるようにやってくれるものと思っていて、自分が理解できないのは教える側の責任だと思っている学生です。

この二番目の学生を想定して、講義をやるのは大変です。私は正直不可能だと思っています。自分で学習する習慣のない学生、そうしようとする気のない学生に教えるのは、理解する方法が個人によって異なることを考えると、至難の技です。たとえ学生が、そのときは分かったとしても、本来の意味で分かり、身につけられてはいないからです。所詮身につくとは、本人が身につけるのであって、それは本人の努力以外の何ものでもないでしょう。

では、このような学生に何もできないかということ、そうではありません。本人をその気にさせることはできるからです。それはどうも教員一人だけでできるものではないと思います。大学のもつ雰囲気、周囲の学生たち、そして大学の教員など、環境が大切だと思います。

大学の環境を作ることは、教員のFDに欠かせない点だと思います。教員にはいろいろな考え方の人がいます。学生の考え方もさまざまです。学生は相性、考え方などが合う教員と巡り会うと、確実に変わります。急に成長し、能力を発揮できるようになります。こういう教員に会うことができる学生は幸せだと思います。同時に、教員にとっても教師冥利に尽きるというべきでしょう。このような出会いが、一つでも多くなるようにすることができればと思います。そのためにはどうすれば良いか。それがFDに求められているものの一つだと思います。

— 「2008年度第14回FDフォーラム」参加報告 —

学部FD副委員長 武藤 秀夫

2月28日・3月1日の2日間、財団法人大学コンソーシアム京都が主催した「2008年度第14回FDフォーラム」に参加してきましたのでご報告をいたします。

大学コンソーシアム京都は滋賀・大阪を含む京都近郊の国公立の大学・短大が参加する大学連携機構です。このフォーラムは始めの頃、この財団の会議室を利用して開催されていたそうですが、現在ではこの財団も50校を超える協賛校をもち、また、昨年度から1000人を超える全国の大学教職員が参加するまでになり、今年のフォーラムも昨年同様に1000人を超える参加者がありました。両日とも、京都市街地南に位置する龍谷大学深草学舎のきれいな建物で開催されました。

今回の統一テーマは、「学生が身につけるべき力とは何か」でした。

2月28日(土) 13:00～ 開会式 13:10～17:15 全体会シンポジウム

「学生が身につけるべき力とは何か」 一個性ある学士課程教育の創造—

シンポジストは、結城 章夫氏(山形大学学長)、石川 憲一氏(金沢工業大学学長)、田中 每実氏(京都大学高等教育研究開発推進センター長・教授)、コーディネイターは木野 茂氏(立命館大学共通教育推進機構教授)でした。

3月1日(日)は、10:00～15:00の間、4つのミニ・シンポジウムと8つの分科会に分けられました。第1～第4ミニ・シンポジウムのテーマは、「地域連携型教育から何が学べるか」、「教職協働—教員と職員との協働—」、「キャリア教育の実践と今後のあり方—学士課程教育の構築を求める動きの中で—」、「大学教育におけるeラーニングシステムの可能性」、

また、第1～第8分科会のテーマは、「1単位45時間の学習の実質化の光と影」、「学生とともに進めるFD」、「未来を担うプレFDの創造—大学院生大学教員準備研修のあり方と課題—」、「教養・文化教育としての外国語教育」、「大学での学びの質を高めるために」、「主体的な「学び」を目指した学習支援—「グループ学習」と「プロジェクト学習」の方法と実践」、「高等教育におけるオルタナティブとしての短期大学」、「初年次教育の展望と課題」でした。

学生が身につけるべき力とは、学生自身が自ら学ぶ力ということになると思いますが、もちろん、学生を「さあ、がんばりなさい」と励まし、野放しにするだけでは十分ではありません。各大学での取り組みは、それぞれの大学の規模や理念と関連して正に様々です。その中で、特に興味をもったことは、学生自身に自分の目標やその達成度を確認させるシステムを積極的に導入している金沢工業大学の取り組みでした。これには各教員のより高い意識が基盤になければなりません、学生の育ち方が変わる予感のするフォーラムでした。





第4回FD授業公開「美術史Ⅱ」2008年12月16日(火)3時限 L-517

20世紀の絵画-現代史の心と体にふれる：平野 千枝子（美術教育講座）

【授業者の思い】

「美術史Ⅱ」は美術教育専修の選択科目で、主に美術教育の2年生と芸術運営コースの希望者による少人数の授業です。必修の「美術史」では、通史により基礎知識の習得を目指していますが、「美術史Ⅱ」では、20世紀前半の西洋絵画を対象を限定しています。そして、作品の歴史的な理解だけでなく、共に鑑賞することで、20世紀の体験と表現の関係を感じとることができればと思っています。美術史を学ぶことは、イメージが無限定に溢れる現代の世界で人は果たしてどのように共感することができるのか、という私たちの課題にも、繋がっていると考えています。

当初は講義を中心にしていましたが、参加人数が少なく、また、基礎的な知識の確認が必要と感じたため、テキストを使用するようになりました。やや古いけれども優れた新書版の概説書を毎回一章ずつ、学生は事前に読んで参加します。また、一章ごとに担当者を決め、指定の事典類で分からない語句を調べてきて、他の人にも配布してもらいます。教科書の内容について私が参加者全員に質問しながら確認し、次に作品のスライドを見ながら新しい解釈も交えて補足します。スライドを見ながら話し合い、時には簡単な制作によって問題のありかを考えます。（色彩の併置について考えるための「塗り絵」など）

着任後4年の試行錯誤によって、今現在はこのような構成で進めていますが、鑑賞においては学生の発言が推進力になるので、年によって展開は変わります。また、学部の美術史の講義は8種類あって受講者も重なっているため、時代と地域の組み合わせ、およびこれに対応する十分な準備に関し、まだまだ課題山積です。この度、講義を点検する機会をいただき、今後少しずつでも自分の言葉を充実させていきたいと思いました。ご意見をくださった先生方に御礼申し上げます。

【授業参加者の感想】 教員・学生アンケートより（参考になった点等、一部を抜粋）

- ◎ 使用されていたテキスト（教科書）の記載事項について、実習・実体験によってその理解を促していること。
- ◎ 実習・実体験が必要最小限に実施され、きわめて合理的な計画がなされたこと。
- ◎ 今日の授業の方向性を確認しながら、その後の展開を図ることで、学生も授業によりよく参加していたこと。
- ◎ スライドなどの視覚教材が効果的に利用されていたこと。
- ◎ 「学生がねむらない」授業とするためになされていたさまざまな工夫。
- ◎ 歴史的な事実を確認させてから、重要な理論を実習・実体験によってその理解を促していること。



FDリレーエッセイ第7回

イタリアの大学の定期試験

国際文化講座 佐藤 一郎

2003年3月から10箇月間、文部科学省の在外研究員としてイタリアのマチェラータという小都市で過ごしました。在外研究員派遣の最後の年度でした。マチェラータはイタリア半島のアドリア海側からやや内陸に入ったところ、ちょうどふくらはぎ辺りに位置します。この町のことを書

き出したら、書きたいことがいくらでも出てきそうですが、いまはそれが主題ではないのでやめます。

マチェラータ大学では哲学人文学部の受入れ教授のもとに通うだけで、授業には参加しませんでした。テーマのFD（恥ずかしいことですがこの用語の意味内容を正確には知りません）と関りそうなことで、思い出すことを書きます。

年の終りに近い頃だったでしょうか。研究室が並ぶ廊下がびっくりするほどの人で溢れていました。定期試験の面接を受けるために待つ学生たちでした。友人の研究員の部屋に入ると、机を挟んで一人の学生と向き合っており、「試験をしているところだ」と言いました。学生に科目の内容のことを語らせ、試問するのだそうです。しかも、それは一人の教員で済まず、一つの科目について二人の教員の試問を課されるとのことでした。筆記試験のほうも一人の答案を二人の教員が評価するそうで、筆記試験と口頭試問の両方に合格してはじめて単位になるわけです。

そういうしくみですから、試験に通るのは簡単ではないらしく、廊下で大勢待っている中には、ふだんなら見ない年恰好の学生もいました。さまざまな理由で学業を中断し、かなりの年数をかけて卒業しようとする学生も少なくないようでした。その友人や受入れ教授から、日本ではどのような試験なのかと尋ねられて、肩身の狭い気持でした。私の場合、試験はふつう大きな題について論じるような問題ですが、一応授業に関係があることが述べられていれば通してしまっているのが実際だからです。

彫刻家で画家のジャコメッティはごく若い頃の手記に「ぼくは（…）個人の考えを表明する自由に反感を持っている（…）しゃべりながら、誰もが自分の頭の中で生まれたみじめな考えを表明することができるのだ、と思いこんでいる。自分の好きなことを考えているようなやつらを、どうして教会はもう、火刑に処したり拷問にかけたりしなくなったのか」と書いています。好き勝手な思いや考えたつもりにすぎないことを低い基準で通していたら、語を連ねれば文章になり、それで何でも思うことを書いてもいいというようなたやすさを助長するだけになります。

15年近く前までは、卒業論文でウィトゲンシュタイン、ハイデガー、ベルクソンなどの著作に取り組む学生がいました。学生が毎週書いてくるものはそのままでは使い物にならないので、初めはほとんど「駄目出し」ばかりでした。学生は不服そうな顔をすることもありましたが、そうした添削を繰り返していくうちに何とか筋の通った論らしきものになって行き、自分でも進歩したことが分るようでした。

いまはそういう手応えのあるテーマを選ぼうとする学生がいなくなりました。それは学生の能力や気質だけの問題ではなく、世の中の大勢の一端にすぎないのでしょうか。しかしそれを云々するのはこの小文の範囲を越えるようです。（次回は、国語教育講座の長谷川千秋先生にお願いいたします。）

◆編集後記◆

学部FD義務化元年が終わろうとしています。委員会活動では、この冊子のカラー化を図ったくらいで、特段の目新しい事業を立ち上げた訳ではありません。これまでのような地道な活動を積み重ねてきました。「気がついたらそれがFDだった」。“空気のような、水のような”意識をしないFD活動が理想です。

来年度も皆様のご協力をお願いいたします。（T・M）

教育人間科学部FD委員会：村松俊夫・武藤秀夫・古家貴雄・古屋義博・皆川卓